

「ヒーローになりたい」

大阪スクールオブミュージック高等専修学校

延次 莉衣奈

「ヒーローになりたい。」それが小さな頃からの私の夢だった。テレビの中で、大きな怪獣にも勇敢に立ち向かい、弱き者を救う。そんなヒーローになりたかった。なれるものだと思っていた。

中学生の私は、俗に言う「不登校」だった。部屋から一步も出る事はなく、ベッドに潜ったまま一日を過ごしていた。小さな頃の夢なんて、すっかり忘れ去っていた。毎日が憂鬱で、自分が生きている事の意味すら分からず、死ぬ事だけを考えていた。そんな私には、恐いものが沢山あった。虫。水。小さい子。でも一番恐かったのは、同級生。私を虐めた人達だった。あの人達に言われた言葉は、今でもはっきり覚えている。沢山の言葉を言われたけれど、その中でも「あんたの声って気持ち悪いよね。」という言葉が、私を一番苦しめた。私の声は低く、女性らしくない声だ。あの日から、私は自分の声が嫌いになった。喋る事を辞め、念入りにマスクをして、自分の声が誰にも聞こえないように、と気を使っていた。「もう二度と声なんて出さない」と心に決めた。

家に引きこもって何日経っただろう。中学一年生だった私は、三年生になっていた。声の封印は、未だに解いていない。相変わらず、人見知りで暗い人間だった。でも、私には一つの楽しみがあった。それは「アニメを見る事」。アニメを見ている時だけは、幸せな気分になった。毎日色々なアニメを見漁って、自分の好きなキャラクターを見つけては、嬉しくなったりして。私の唯一の生きる意味だった。ある時、いつものようにアニメを見ていると、テレビから、とても素敵な声 flowed。低めな女性の声。一瞬で恋に落ちて、すぐにそのキャラクターの声優さんを調べた。その人は、ボーイッシュな女性声優さん。私はすっかり、彼女のファンになっていた。彼女の声を聞く事。私の楽しみが、また一つ増えた。

それからまた何週間か経った頃、彼女が出演しているラジオを聞いた。そのラジオで、「自分の声」に関する話題が出た。これを聞いていた時、何だか心がモヤモヤした。私が自分の声にコンプレックスを抱いていたからだろうか。少し落ち込んで、ラジオを消そうか迷っていると、ラジオから彼女の声が聞こえてきた。「私も、昔は自分の声が嫌いだったんです。女性なのに低いし。」驚いた。その低い声を生かして、あんなにも素敵な演技をしているのに、彼女が自分の声にコンプレックスを抱いていたなんて。過去の彼女が抱えていた感情が全て分かるような気がして、自分と彼女が重なったように思えた。彼女はこう続けた。「でも、声優になってから、アニメに出るようになってから、自分の声が好きになりました。私の声で、人を笑顔に出来るんだって分かったの。」彼女の言葉を聞いて、何故だかは分からないけれど、涙が止まらなかつた。彼女の言葉が暖かくて、優しくくて、救われたような気分になった。自分でかけた封印を、彼女が解いてくれた。彼女は、私のヒーローだった。

私は今、高校で芸能を学んでいる。歌、演技、楽器。辛い事も沢山あるけれど、自分の好きな事だから、頑張れる。そんな私の夢は、「声優」だ。自分の声を生かして、沢山の人達に幸せになってほしい。私の声で人を笑顔にしたい。そう思って、毎日一生懸命、授業や稽古に勤しんでいる。でも、私の夢はこれだけではない。もう一つ、大事な夢がある。それは、「ヒーローになる事」。現実の世界には、怪獣なんていない。でも、アニメの世界は違う。怪獣だって、宇宙人だっているのだ。いつか私もヒーローになって、強い怪獣を倒したい。そして、弱き者を救いたい。彼女のように。